

義淨房御書 あいかま あいかま
相構あいかまへ相構あいかまへて心こころの師しとはなるとも心を師しとすべからずと仏ぼとけは記しるし給たまひしなり。
法華經ほけきょうの御おんたま為みに身みをも捨て命いのちをも惜おしまざれと強盛じょうじょうに申せしは是これなり。南無妙法蓮華經蓮華經、南無妙法蓮華經。

文永十年五月廿八日

義淨房御返事

日蓮花押

六六九頁

本抄は文永十年五月二十八日、大聖人様が御年五十二歳の時、配流先の佐渡の国、いちの谷さわから清澄山の義淨房へ賜たまつたところの御書です。

義淨房は、安房現在の千葉県清澄寺住職であつた道善房の弟子で、大聖人様の兄弟子に当たる僧侶でした。十二歳で清澄寺に上がられた大聖人様にとつて、兄弟子の淨顯房と義淨房の二人は、初步的なことから教育を施す直接の師匠のような存在だったのです。

内容は本抄の冒頭に「御法門の事くわ委くわしく承り候ひ畢んぬ」とあり、また次に「法華經の功德と申すは」とあります。が、義淨房から法華經の功德について種々ご質問があり、それに対する御返事であります。最初に法華經の功德について述べられ、功德といつても、修行があつての功德で、しかもその修行は末法の機法相応の如説修行でなければならぬと申されているのであります。本抄はまた寿量品・自我偈の「心欲見仏」の文によつて、大聖人の己心の仏界を表わされたところから、「己心仏界抄」とも呼ばれているのであります。最後に冒頭に拝読いたしました御文の「法華經の御為に身をも捨て命をも惜しまざれと強盛に申せしは是なり」とありますように、不自惜身命の決意で、仏道修行に邁進すべきであると、信心姿勢について常に不惜身命の信心こそが大切な事であると御指南になつてお手紙であります。

また大聖人様は、報恩抄(一〇三一頁)に「日蓮が景信かげのぶにあだまれて清澄山を出でしに、追ひてしのび出いでられたりしは天下第一の法華經の奉公なり。後生は疑ひおぼすべからず」と仰せになり、大聖人様が立宗宣言せられ、地頭の東条景信に追われた時、淨顯房と義淨房の二人が、大聖人様とともに清澄寺を下り、大聖人様を外護されたことを称讀つかがされています。しかし義淨房は、その後しばらくして清澄寺に戻り、師匠の道善房に仕えていきます。そのような中にあつて、義淨房はたびたび大聖人様に御法門を尋たずね、理解を深めていったようです。

本抄の冒頭には、「御法門の事くわ委くわしく承り候ひ畢くわんおわんぬ」とあり、大聖人様が佐渡におられるときにも、義淨房は御法門を尋ねたことがうかがえます。ゆえに本抄は、義淨房の、御法門に関する質問に対する返書であると拝せられます。

まず、法華經の功德について述べられます。法華經を修行することによって得るところの功德は、唯仏與仏の境界、すなわち釈尊と多宝如來のみが知る境界であり、十方分身の諸仏といえど領解りょうがくできないものであると御教示なされています。

さらに、その法華経の修行には様々な姿があり、天台大師、妙楽大師、伝教大師等のみが知る法門であると仰せです。それは天台・妙楽・伝教という方々だけが、法華経の所詮（結局のところ）である十界互具・百界千如・一念三千の法門を正しく知る立場だからなのです。

次に、**寿量品**の法門は、大聖人様にとつて**依拠**となる法門であり、天台や伝教もほほ知りながら言葉に出して述べることができない法門であるとお示しです。つまり、大聖人様のお立場におかれての「一念三千の法門があることを表示されているのです。続いて、**大聖人様**のお立場におかれての「**一念三千とは何かをお示しです。自我偈**」の、「**一心に仏を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜しまず**」（法華経 四三九頁）の文を挙げられ、この文によつて大聖人様の己心の仏果を顯すのであり、そのゆえは**寿量品**の事の「**念三千の三大秘法を成就したのは、この経文によつたからであると教示されます。**」ここに、**三大秘法**こそ大聖人様のお立場におかれての「**一念三千であることが明示**されているのです。

次いで、「**心欲見仏 不自惜身命**」の文を釈され、「**心欲見仏**」の本義は**妙法蓮華経**であり、**不自惜身命**とは妙法蓮華経の五字を弘通することを説示した文であると述べられています。そしてこの文を、身をもつて行じられている大聖人様こそ、**無作三身**の仏果を成就した本仏であることを御教示なされているのであります。

最後に、自らの心を師とせず、法華経のためには身を捨て命をも惜しまず精進するよう御指南なされて、本抄を結ばれているのであります。拝讀の大事なポイントとして

一つ目は、法華経の功德についてです。

功德の「功」とは修行のことで、修行をして自ら功を積んでいく、**善因**を言います。そして、その修行によつて勝れた**果報**というものが命の中に自然に具そなわつていくのであり、それが功德の**徳**」ということです。

大聖人様は本抄に、**法華経の功德と申すは唯仏与仏の境界、十方分身の智慧も及ぶか及ばざるかの内証なり。**されば天台大師も妙の「**字をば、妙とは妙は不可思議に名づくと釈し給ひて候なるぞ**」と仰せになられ、法華経を信じて修行するところの功德は唯仏与仏の境界であり、十方分身の諸仏の智慧によつても知ることのできない不可思議な功德であると教示されています。つまり御本尊様の功德は、十方分身の諸仏の智慧でさえも知ることができない功德ですから、凡夫の私たちには到底推し量ることのできない不可思議な功德なのです。

入信していくも勤行・唱題をしない、折伏をしないことでは功德はありません。

それは、功德の功とは修行であるからです。修行をせずに勝れた果報は得られないのです。反対に、勤行・唱題・折伏の修行によつて功を積むならば、結果として必ず勝れた徳を得て幸福になつていけるのです。これが信心の道理なのです。

私たちは、日々の生活の中で様々な問題に直面し、悩み苦しむことがあります。その

ようなときこそ、御本尊様の不可思議な功德を信じて唱題に唱題を重ねることが大切なのです。なぜならば、その確信ある唱題によつてこそ、いかなる問題も乗り越えることができるからです。

二つ目は、大聖人様と『寿量品』との因縁です。

本抄の、『寿量品の法門は日蓮が身に取つてたの頼みあることぞかし。天台・伝教等も粗ほぼしらせ給へども言に出だして宣べ給はず。竜樹・天親等も亦是くの如し』とは、大聖人様が二千余年の当初そのかみにおいて、教主釈尊より『寿量品』という本門の法体を譲られていることを意味しており、天台・伝教等もある程度は知つても、言葉に出して述べることはできないことを説示されています。

本抄を認められた一ヶ月ほど前に、法本尊開顕の書と言われる『觀心本尊抄』を著わされ、法体の付嘱と法体の内容について詳述されています。したがつて本抄では、その意義の上から法体の付嘱について簡潔に述べられたものと拝されます。すなわち、法体たる久遠元初くおんがんじよの法を御所持されているのは、大聖人様御自身であることを本抄において説示されたものと拝されます。

三つ目は、大聖人様の己心の仏果についてです。

本抄では、「一心欲見仏 不自惜身命」の文を挙げ、この文によつて己心の仏果を顕されたと御教示されています。

また、大聖人様はその所以を、其の故は寿量品の事の「念三千の三大秘法を成就せる事比の経文なり」と仰せです。三大秘法とは本門の本尊と戒壇と題目ですが、この三大秘法を「心欲見仏 不自惜身命」の御文によつて成就したと教示されているのです。すなわち、大聖人様の命がけの御振る舞いこそが事の「念三千の御振る舞いであり、そこに三大秘法が成就しているとの御指南です。

三大秘法が末法万年の御化導の上において成就されたのは、弘安二（一二七九）年の本門戒壇の大御本尊様の御図顕にあります。このことからすれば、本抄における三大秘法の成就という教示は矛盾するかのように拝されます。

では、本抄における「三大秘法の成就」とはどのように拝すべきでしようか。これは竜の口法難を機に、大聖人様が凡夫の御姿において久遠元初の御本仏の御命を悟られ、その御境界をもつて佐渡の国に渡られたことを意味しているのです。本尊とは法華経の行者の「身の当体なり」（七七三頁）の御文のごとく、久遠元初の御本仏の御命を顕された大聖人様の色心は、そのまま本門の本尊であり、唱え給う題目は本門の題目、大聖人様のおわします所は本門の戒壇となるのです。したがつて、本抄における「三大秘法の成就」とは、大聖人様の御身における三大秘法の成就であり、己心の仏果ということなのです。

大聖人様は本日拝読しました本抄の結びに、相構あいかまへ相構へて心の師とはなるとも心を師とすべからずと仏は記し給ひしなり。法華経の御為に身をも捨て命をも惜しまざれと強盛じょうじょうに申せしは是なり」と仰せになり、大法を弘通していく心構えをお示しです。

折伏は難事であることから、なかなか踏み出せない人もいれば、すぐに断念してしまふことも少なくありません。また、難を恐れて実践できない場合もあります。大聖人は、このような惰弱な信心を諒められているのです。

されば、斯くの如く大聖人様は本抄の前段において、御身が妙法の当体にして久遠元初の御本仏であることを明かされましたが、その中で、特に「心欲見仏」の経文について、「心に仏を見る、心を一にして仏を見る、一心を見れば仏なり」（六六九頁）と、弛まぬ信心修行の姿を示されています。

この「心」の在り方について、拝讀の御文では、心の師とはなるとも心を師とすべからず」と、即ち、煩惱充满の凡夫の心を中心にしてはいけないと諒められているのです。本抄にも、心とは法であるとお示しです。私達が定めるべき「心の師」とは、あらゆる心を具なえた「念三千の妙法、末法においては本門戒壇の大御本尊に他なりません。

総本山第六十七世日顯上人は、御本尊様に向かい奉つて南無妙法蓮華經のお題目を唱えていくところに、我々の心が常に正しくなつていくという所以があるわけあります。顯全一一一五四三と御指南されています。私達は、我意我見に執われず、また邪宗教に惑わされることなく、本門戒壇の大御本尊を「心の師」と仰ぎ、手継の師匠たる血脉付法の御法主上人の御指南を心肝に染めて、純粹な信心を貫いていくことが最も肝要なのです。

また太聖人は拝讀の御文において、法華經の御為に身をも捨て命をも惜しまざれと強盛に申せしは是なり」と仰せられています。第六十六世日達上人は、不自惜身命の修行とは、身口意の三業の修行でございますから、口の修行はこの道場において、御本尊に向つて南無妙法蓮華經と唱え、身の修行とは、即ち折伏行に励み、意の修行とは、身も口も折伏も、お題目を唱える修行も、皆具わつたところの心の信心のことです。身口意三業にわたつて大御本尊様に信心してこそ、はじめて眞の日蓮が弟子檀那となることができるのです。達全一一一一三三と指南なされています。

されば日如上人猊下は私達は、折伏に「歩踏み出せない」、また「勇気がなくて実践できない」という弱気な心に打ち勝ち、自身の成仏のため、また他の人の幸福のために、人を選ばず縁あるすべての人に対し、破邪顯正の折伏に徹していこうではあります。私どもの折伏は広大無辺なる妙法の功德を説くものであつて、したがつて、邪義邪宗に対して傍観者的姿勢であつたり、弱々しい折伏であつてはなりません（中略）。立正安國論の御指南に従つて、邪義邪宗の謗法こそ、人々を不幸にし、國家・社会を危うくする元凶であることを伝え、敵として、不幸の根源となる謗法を破折することが大切なのであります。しかして、その折伏は、だれでもできることであります。大日蓮・令和七年十月号）と御指南なされています。

本年も残すところ、半月となりました。私達が大聖人の弟子信徒として、いま為すべきこと、やらなければならないことは、何と言つても折伏です。年頭、御宝前にお誓いした折伏誓願を成就せずして、新年は迎えられません。」最後まで諦めずに必ず達成するとの強い信念を持ち、唱題と折伏に全力で挑戦してまいりましょう。以上。